View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

内村鑑三のキリスト教思想と社会批判

――内村の抵抗観とダニエル書解釈――

岩　野　祐　介

はじめに

内村鑑三というと、反骨の人、預言者的信仰者といったイメージが思い浮かぶのではないだろうか。それらは「不敬事件」や日露戦争に際しての非戦論等から導き出されているように思われる。

内村が日本社会のあり方に対して批判的意識を持ち、人々に対する訴えかけを続けていたことは確かである。しかし彼の訴えかけが、社会的行動、特に組織的行動、運動を促すようなものではなかったこともまた事実である。例えば内村は日露戦争開戦に反対していながら、弟子の一人である齋藤宗次郎が日露戦争のための納税・兵役を拒否するとの意志を公表した際は、花巻に出向いてそれを思いとどめさせようとした。その理由は、兵役・納税の拒否は「聖書の曲解[1]」であり、それにより「友人と家族とに迷惑を掛くるは実に愛の精神なきもの[2]」だからであった。日露戦争開戦後には、次のように述べてもいる。

> 私共は戦争の破裂するまでは私共の微力のあらん限り、之に向つて反対を唱へました、然(しか)しながら私共の切望が納れられずして、開戦となりました以上は、…私共は今度は如何(いか)にして一日も早く平和を恢復せん乎との思考(かんがへ)を起すに至つたのであります[3]、

1　齋藤宗次郎『恩師言　内村鑑三言行録・ひとりの弟子による』(1986、教文館) 83ページ。
2　同前。
3　内村鑑三、「戦時に於ける非戦主義者の態度」、1904、『内村鑑三全集12』、(『内村鑑三全集』1980-84、岩波書店刊。以下、『全集』と表記する)、151ページ。

この「平和の恢復」のためになすべきことは、出征兵士の遺族の慰問、殖産、家庭の幸福、山林の栽培、鳥類の保護、河川の利用、土壌の増肥等「総て平民の生涯を幸福ならしむる」事業であると内村は述べる[4]。これは平和運動としては、概して間接的で慎重なやり方と言えるのではないだろうか。

内村が具体的な行動に対して慎重であったことは、結果として次世代の弟子たちの日本の軍国主義に対する対応の違いを生むことにもなったように思われる。次世代の無教会主義キリスト者からは、反政府的発言のため職を追われた矢内原忠雄、徹底して戦争に反対した政池仁といった人物が出ている。実際に兵役拒否に及んだイシガオサムも、内村から間接的影響を受けていた。一方塚本虎二や黒崎幸吉等日本の戦争を擁護しそこに神の意志を見出そうとする立場をとる者もまた無教会にはいた。さらに朝鮮出身の金教臣や咸錫憲は、内村から学んだことを応用する形で聖書とキリスト教思想に基く朝鮮の解放運動へと向かった。このような多様性が見られるということは、彼等弟子たちがそれぞれ、自分なりの判断と対応をしたということであって、無教会主義のキリスト教思想に彼等を反対行動へと直接的に結びつけるものがあったとは言い難い、ということになるのではないだろうか[5]。

それでは、社会に対する内村の態度と彼のキリスト教思想には、いかなる関連があったのであろうか。

なお、引用文に付されたルビのうち、通常のルビは「聖書之研究」等の原典から付されているものであり、〔　〕に入ったルビは全集編集者により付されたものである。

4　同前、152-155ページより抜粋。

5　第二次世界大戦に対する無教会主義者の態度に関しては、藤田若雄編著『内村鑑三を継承した人々　上下』（1977、木鐸社）や千葉眞「非戦論と天皇制問題をめぐる一試論　―戦時下無教会陣営の対応」『内村鑑三研究第四十号』（2007、キリスト教図書出版社）に詳しい。

またイシガオサムについてはイシガ『神の平和　兵役拒否をこえて』（1992、日本図書センター）、金教臣については新堀邦司『金教臣の信仰と抵抗　韓国無教会主義者の戦いの生涯』（2004、新教出版社）、咸錫憲については曺亨均『韓国のガンジー　咸錫憲の基本思想』（2000、伯裁文化社）を参照した。

1－1　内村のキリスト教思想と社会批判

そもそも内村は個人、自由、独立といったことを重視する一方で、集団的・組織的になったときの人間に対しては不信を抱いていた。集団性は党派性となり、自分たちと異なる人間を排除しようとする傾向を持つ、というのである。そのため、単独の人間こそ誰とでも友となることができる、と内村は説明する。内村によればこれこそキリスト的な友情なのである[6]。その意味で、内村は確かにキリスト教信仰に基く社会批判意識を持っていた。またその批判意識が不敬事件のような実際の行動に表れることもあった。しかし内村は教育勅語拝礼への組織的反対運動を展開しようとはしなかった。非戦論も組織的な運動へと展開されることはなかった。内村は、国家の仕組みそのものを変えようとする方向で組織的に社会に働きかけようとはしないのである。また一切の暴力的手段に対して批判的であった。

1－2　キリスト者と社会への関わり

このような内村の態度を不徹底と感じ、批判した人物に田中正造がいた。田中は内村に、聖書の研究ばかりしていないで具体的行動をしてほしい、と訴えたようである[7]。それに対して内村は、次のように反論している。

> ○今は聖書を棄て起つ時であると云ふ人がある、と云ふのは聖書の研究を棄(すて)て社会的事業に従事せよと云ふことであるさうだ、然し我等には其意が少しも受け取れない。
>
> ○先づ第一に聖書は吾等の霊魂の糧である、聖書を棄てよとは吾等の兵糧を棄てよと云ふのと同然である、世に兵糧なくして戦争(たゝかひ)に出よと曰ふ者あるを聞かない、而(し)かも聖書を棄てゝ起てよと言ふ人は兵糧を棄てゝ戦争

6　たとえば「単独の勢力」(1909、『全集17』7ページ)、「単独の勢力」(1912、『全集19』232ページ)、「単独の幸福」(1920、『全集25』580ページ)等でこのような主張がなされている。

7　内村の文章には田中より政治的活動に関わるよう要求された、との記述が見られるのであるが、田中の文章として記録されてはいないようであり、田中正造全集にもこの書簡は見当たらない。

に出でよと勧める者である[8]。

内村は、聖書と信仰から離れて運動はあり得ないと考えていた。しかし田中と交流があったということは、内村が社会問題から目をそむけていたわけではないということでもある。共に行動に出ることこそなかったものの、内村は田中の動向を気にかけていたのである。

田中はその死の際に聖書を傍らに置いていたと伝えられるが、キリスト者ではなかった。それではキリスト者が政治と関わることについて、内村はどう考えていたのであろうか。内村と同時代にキリスト教伝道から政治へと転進した人物に、横井時雄がいる。横井は不敬事件の後苦難の中にあった内村に救いの手を差し伸べた、内村にとっての恩人でもあった。その横井が政治家に転身したことについて、内村は次のように述べている。

> 余は此政府を以て日本国を救ひ得べしと信ずる横井君の頑是無き心を愛す、余は宗教に失望して政治に入りし君の心を憐む、余は此事に就て深く君を咎めざるべし、そは宗教界今日の泥濁は政治界のそれに一歩も譲らざればなり[9]、

内村は横井の死に際しても文章を寄せているが、基本的な立場は変わっていないように思われる。

> 君は日本国を救はんと欲したのであります。而かも早く、君の一生の内に救はんと欲したのであります。そして伝道に従事すること二十年、功績の見るべき者ありしと雖も、而かも君の理想を離るゝこと遥に遠しでありまして、君はジレツタクなつたのであります。私が君の口より聞いた最も悲しき言葉は是でありました。君は一日私共に告げて言はれました。
>
> 君！伝道ではとても駄目だよ、僕は……
>
> 僕は伝道を止めて政治を試みるよとの事でありました[10]。
>
> 政治に由て日本国を救はんと欲して政治は君を精神的に殺しました。悪

8　内村「聖書を棄てよと云ふ忠告に対して」、1902、『全集10』、96ページ。
9　内村「横井時雄君の就官を聞て」、1901、『全集9』、117ページ。
10　内村「故横井時雄君の為に弁ず」、1928、『全集31』、153ページ。

むべきは日本今日の政治ではありません乎[11]。

日本を救うという目的のため効率や規模から政治的手法を選んだ横井と、「泥濁」「精神を殺す」といった面で政治を遠ざける内村、という対比がここに表れていると言えるだろう。

1－3　内村の政治嫌い

このような内村の「政治嫌い」の中でも、特に目を引くのは民主主義に対する批判である[12]。第一次世界大戦を経験した内村は、人間による政治体制であるという点で民主主義も帝国主義も同じようなものであり、究極的な解決を得るためには神の直接的介入を待つしかないと述べる[13]。

確かに現代の日本政治においてさえ、投票により世の中が変わる、という実感を有権者が得ることはかなり難しいだろう。それでも、一部の人間が独裁的・専制的に動かす社会と、何がしかの影響力を一人ひとりの市民がそこに与えることのできる社会とでは、後者の方が内村の重んじた自由・独立が可能となる社会であるようにも思われる。しかし内村の政治的なものへの嫌悪は徹底的である。ルターの宗教改革に関しても、政治的手法を用いたのが失敗であったと評する。

> ルーテルは半ば独逸貴族の愛国心に訴へて彼の改革事業に成功したのである、而して災禍の因は茲に在つた、此時教権の大部分は羅馬教会より独逸政府に移つたのである、…此世の王公貴族をして宗教事業に携はらしめてルーテルは四百年後の今日まで拭ひ難き大なる害毒を遺したのである[14]。

それでは内村は、宗教と政治の関わりの問題をどう解決すべきと考えるのだろうか。内村は政治性が支配の問題、他者を排除する原理となったことを問題視

11　同前、155ページ。
12　内村によるデモクラシー批判とその特徴・問題点については、近藤勝彦『デモクラシーの神学思想』437-440に詳しい。特に内村のデモクラシー批判に教会史・思想史の観点が欠落していることの指摘は重要である。
13　例えば「聯盟と暗黒」（1919、『全集24』553ページ）等でこのような主張がなされている。
14　内村「ルーテルの遺せし害毒」、1917、『全集23』、417-8ページ。

し、次のように述べる。

> 茲に於てか我等は第二の宗教改革を要するのである、…信仰の上に愛を加ふる改革を要するのである、…勿論信仰抜きの改革ではない、信仰を経過して然る後に愛に到達せる改革である[15]、

信仰や愛により人間の内面から変えるやり方をすべきと内村は言うのである。この立場は、「ローマの信徒への手紙」13章1節の解釈にも表れている。

> いかなる時代の如何（いか）なる政治組織の下に於ても一国の秩序を維持するための権能は必ずあるべきである、…如何なる人をも愛し我敵をも愛するが基督者の道である以上は、良き国家に対しても悪き国家に対しても服従と愛とを以て対し、たとひ暴圧治下にありても尚ほ我を虐（しいた）ぐる権能者に服ひ且これを愛するの心を抱くべきであると云ふのである[16]、

内村は個人と国家・政治体制との関連を、愛に関する教え、特に愛敵の教えから解釈するのである。そして、あまりに国のあり方がひどい場合は革命のような手段をとっていいのではないか、という問い[17]についても、次のように答える。

> この問題に対して先づ注意すべきは斯かる場合の甚だ稀であると云ふ一事である、そして稀なる或場合には或は政権反抗が正しくあるとしても、そのため常の場合の反抗が正しいと云ふことにはならない、…政治の非違その極に達して民皆苦む場合の如きにも、基督者は平和的手段にのみ訴ふべきである[18]、

このように抵抗するとしてもその手段は平和的なものでなければならないと考える内村は、悪法と知りながらそれに従って自ら毒を飲んだソクラテスや、あくまでも非暴力主義[19]をつらぬくガンディーのようなあり方こそが、（いずれも非キ

15　同前、425ページ。
16　内村「羅馬書の研究」、1921、『全集26』、403-404ページ。
17　同前、405ページ。
18　同前。
　なお内村は、当時の日本の政治は「比較的良政」（同前、407ページ。）と評価している。
19　内村はガンディーのやり方を無抵抗主義と呼んでいるが、これは非暴力主義のことと考えて差し支えないと思われる。

リスト者でありながら）キリスト教的であると述べる[20]。

内村は不敬事件のような社会的抵抗行動に及んだ人物でありながら、自身は具体的抵抗行動に対して否定的であったのである。続いてはこの問題を、内村の聖書解釈テキストを通して確認していきたい。

2—1　内村の社会批判とダニエル書解釈

以下で焦点を当てるのは内村によるダニエル書解釈である。ダニエル書を題材とするのは、ダニエルが異教徒である征服者の中で、自らの信仰を守りながら政治家として誠実をつくす人物だからである。

内村がダニエル書を解釈した文章には1906年の「ダニエルの生涯」等もあるが、ここでは1920年の「ダニエル書の研究」を用いる。この時期はすでに再臨運動も経過し、内村のキリスト教思想が既に完成されていると言ってよい時期であり、彼のキリスト教思想の特徴を導きやすいと考えられるからである。この時期にダニエル書を題材とした理由について内村は「今日の如く世界改造の声高くして多くの人が不安の念を抱く時に際しては、世界の将来如何人類歴史の終局如何の大問題に関する聖書の観察を明白ならしむるは正に刻下の急務である、而して之が為には但以理書を措(お)いて他に其目的を達する事が出来ないのである[21]」と述べる。

「ダニエル書の研究」はダニエル書1－6章の解釈からなる[22]。第1回で内村は、まずダニエル書の歴史的背景と史実性について概説し、「霊に由て記されたる聖書は霊に導かるゝ信仰家のみ能く之を解する[23]」と述べ、史実性よりも信仰の問題として捉えることに意味があると主張する。そしてその上で、1章から虜囚となったダニエル等がユダヤ教の教えを守り食事を拒否する場面を挙げ、信仰を維持することの困難さと重要さをそこから読み取る。

20　前出「羅馬書の研究」、408ページより。
21　内村「ダニエル書の研究」、1920、『全集25』、283ページ。
22　ダニエル書2章について2回用いて講義しているため、全体の回数は7回となる。
23　前出「ダニエル書の研究」、286ページ。

亡国の捕虜が大国の宮殿に在て王の用ゐる食物を自己の信仰に抵触するの故を以て断然拒絶したのである[24]、

ダニエルは王に歴仕する事前後五代、力を尽して国を治め民を益し而も其信仰に就ては何人にも譲らず、七十年の久しきに亘り世界無比の政治家的生涯を続けたのである、而して其萌芽は彼が少年時代に王命を拒絶して其飲食物を斥けたる信仰の闘に於てあつた、此最初の小問題に勝ちたるが故に彼は又晩年獅子の穴に投入れらるゝも尚信仰の善き戦を闘つたのである[25]、

そして内村は、このようにたとえ小さな教えであっても守り通さねば信仰を守れなくなってしまうため、世間の習慣に安易に妥協してはならないと語る。とはいえ、そのためにむやみに周囲とトラブルを起こすべきではないと言い、ダニエルが死に至るまで「常に愛を以て平和を守りつゝ信仰を維持した[26]」ことを、「全く勇者の確信より出でたる強さである[27]」と讃えている。手段はやはり平和的であるべきと内村は考えたのである。

続けて内村は、ダニエルが政治家的な預言者であることに言及し、そこにダニエル書の独特の価値があるとする。

但以理書が特に我等に興味を与ふる所以はダニエル彼自身が他の多くの預言者と異なり政治家的預言者（statesman-prophet）たる事にある、…而して彼はその政治家としての立場より世界の終局に至る迄の未来を預言したのである、純宗教家の預言ではない、世界無比の政治家の未来観である[28]、

2−2　歴史観と社会批判意識

続く第2・3回で内村は、2章の歴史的背景、特にバビロン帝国の繁栄とその高

24　同前。
25　同前、287ページ。
26　同前、288ページ。
27　同前。
28　同前、288-9ページ。

度な文明について詳細に説明し、その中で信仰を保ったダニエル等の信仰の堅さを強調し、そしてネブカドネザルの夢の物語へと話を進める。

王が見た、金の頭、銀の両腕と胸、胴の腹部と腿、鉄と陶土の足を持つ像の夢を、ダニエルはバビロンの繁栄と衰退、分裂を示すものと解釈する。内村によればこれは「ダニエルなる政治家的気質の人がバビロンなる偶像国に於て示されしもの[29]」であるため夢は「バビロン的即ち偶像的[30]」であり、また「説明は政治家的[31]」であるとされる。しかし内村は、同時にその精神は「ユダヤ人的にして基督者的[32]」であると述べる。内村によれば、このような崩壊過程はバビロンだけでなくあらゆる歴史上の大帝国に該当し、分裂して権威も分散し亡びに至る際の「分散」に該当するのが近代の民主主義である。ともなれば、民主主義が盛んに唱えられていた当時の日本社会も、亡びにいたる途上にあることになる。その亡びから世界を救済するのが、キリストである。ゆえにこの預言はキリスト教的だ、ということになるのである。

しかし、究極的な救いはキリストのみによりもたらされるからといって、信仰者はただそれを待つだけということにはならないと内村は考える。

> ダニエルの生涯を見よ、後に此信仰ありしが故に他の政治家等の戦々競々として失望落胆を繰返せる間に彼れ独り儼然として立ちて二王朝五代の王に仕へ七十年間其最善を尽して世界の民を救ひ以て偉大なる政治家的生涯を終つたのである、聖書を其儘に信じキリスト再び来りて神国を建て給ふ事を信ずる者と然らざる者との間に一の大なる差別がある、之を信ずる者は少くとも失望を知らないのである[33]、

終末への待望が、目前の困難に立ち向かう希望を人に与えると内村は考えるのである。

29　同前、295ページ。
30　同前。
31　同前、296ページ。
32　同前。
33　同前、301ページ。

2−3 「異教」世界のキリスト者

第4回では3章より、特にネブカドネザル王の像を礼拝することを拒んだダニエルの友人3人が命の危険にさらされ、神の力により救われる物語が取り上げられる。内村はダニエルの友人3人の信仰を賞賛し、試練の中でこそ「神が共にある」ことを実感できると説く。「今日尚小ネブカドネザルは至る所に於て在る、…彼等は自己の勢力を張らんが為め若くは配下の服従を要求せんが為め種々なる偶像を拝せしめんとする[34]」、「彼等の迫害を恐るゝ勿(なか)れ、信仰は信仰、生活問題は生活問題なりと言ひて之を免かるゝ勿れ、神の子を友として己が側に置くその名誉ある千載一遇の機会を失ふ勿れ[35]」。

同時に注目すべきは、迫害者に対する神の報いを内村が求めないことである。むしろ内村は、異教国バビロンに仕えるダニエルの職務を、責任ある重要な職務であると述べる。4章について講義した第5回でも内村は、次のように言っている。

> 若(も)しダニエルに卑しき心ありしならんには此時こそ王を抑(おさ)ゆべき時にして王の上に己が権力を揮ひて全国に勢力を張らんと企てたであらう、然乍(しかしながら)彼は少しも自己を憶ふ事なく唯(ただ)王を愛し王の為に懼れ敢(あえ)て諫(かんげん)言を呈して憚(はばか)らなかつた、茲に真個(まこと)の忠臣がある[36]、

4章でダニエルは王の見た奇怪な夢を解釈し、王はその通りに「人間の社会から追放され、牛のように草を食ら[37]」うことになる。これは王の権力を奪う機会でもあったはずであるが、そうはせず仕え続けたダニエルを内村は「真個の忠臣」と高く評価するのである。

第6回では5章が解釈される。5章では指の幻が壁に字を書き、ダニエルはこの文字を解釈するが、その夜に王が殺される物語が語られる。内村はこれをヨハネの黙示録18章と結びつけ、物質的文明が頂点に達した後は滅亡するだけである、と述べる。

34　同前、306ページ。
35　同前、308ページ。
36　同前、309-310ページ。
37　新共同訳聖書、ダニエル書4:30より。

> 茲に於てか我等は聖書の言に従ひて「大なるバビロンの中より出で」なければならない（黙示録十八の四）、然らば我等は此のバビロン文明に頼るを止めて何に恃むべき乎、曰く聖書あるのみである、…今は共産主義普通選挙等の論喧（かまびす）しくして基督者は却（かえつ）て時代遅れを以て評せらる、基督者の立場は恰も海中に屹立する磐の如きである、…基督者は決して潮と共に進退しないのである[38]。

第7回では6章より、既に老齢のダニエルが獅子の穴に投げ入れられた物語を講義している。内村はここでも「我等は神の戦を闘はんが為に世に遣（をく）られたのである、彼等（引用者注:迫害者を指す）に辱（はずかし）められつゝ自己の信仰を維持するは我等の基督者となりし理由である、…[39]」「憐むべきは穴に投ぜられたる基督者に非ずして却て卑劣手段の遂行を以て事終れりとする世の多くの迫害者である[40]。」と述べ、ダニエルに降りかかった試練は「基督者を激励すべき偉大なる教訓[41]」であるとする。

以上のように、内村のダニエル書解釈において、バビロンでのダニエルの立場はしばしば日本におけるキリスト者の立場と重ねて描かれている。そして安易に周囲に迎合せず信仰を守ることが奨励される一方、「異教徒」である権力者に愛をもって仕え、その過ちを訴える場合も平和的にすべきであるとされる。「異教徒」の世界にあってキリスト者がいかに行動すべか、その判断基準は聖書により与えられる。キリスト者に課せられる試練は、信仰をより深め強めるためのものと解釈され、試練を与える体制そのものについての解決を求めるべきとは考えられない。解決は神の手によりなされるのである。しかし、だからといってキリスト者はただその最終的裁きを待つだけなのではない。むしろそこから今の問題に立ち向かう希望を得ることができるのである。

38　前出「ダニエル書の研究」、322-323ページ。
39　同前、329ページ。
40　同前。
41　同前、332ページ。

まとめに代えて

聖書が変化しない磐であるならば、それを土台とする内村の立場も不変なのであろうか。そう簡単にはいかない。聖書に示されるのは一つの立場だけではないからである。例えば聖書からは予定説も万人救済説も導き出される。選びの問題について、残りのものが救われるためにまずあるものを選ぶという解釈を内村は提示している[42]が、これは内村の解釈である。この世の主義は変転しても聖書は変わらないという主張もまた、内村の解釈だということになる。そして聖書の文言そのものが変わらないとしても、時代と状況に応じた解釈の幅があるはずである。パウロの手紙の文言自体は変化せず伝えられてきたにもかかわらず、ルターがそこから新しい意味を読み取ったように、である。内村が無教会主義を主張したのも、ひとつには欧米由来の教派教会は欧米の歴史的背景を背負ったものであり、日本には日本の歴史的背景に合ったキリスト教が必要だと考えたからであった[43]。これもまた聖書の解釈から導かれた、新しいキリスト教のあり方である。神に従うと言っても、内村の場合は神との神秘的交流等は考えず、聖書を読むことから神の意志を知ろうとする立場である。読んで、知り、従うのは、やはり主体としての内村であるということになるのではないだろうか。

こうして、聖書を通して神の意志を捉えようとし、また人間の国を神の国に対置させることにより、内村は人間世界の絶対化を食い止めることができた。それにより天皇制国家に対しても距離感を保つことができたのである。

しかし、神のものと人間のものという二元論的な思考法により、人間世界全てが「神の世界ではない」という点で無意味なものとなる可能性もまたそこにある。信仰の自由が圧迫されれば抵抗するが、そうでない場合はこの世の権力に従うべき、という態度は一歩間違えれば政治や社会への無関心になりかねないのではないだろうか。民主主義に関わる内村の発言に、そのような問題が含まれてい

42 例えば「再び万人救拯説について」(1926、『全集30』) 175-7ページでこのような解釈が示される。
43 例えば「教会問題」(1904、『全集12』) 113ページでこのような主張がなされている。

ることは確認したとおりである。もちろん内村が現実の世界に対して無関心ではなかったことは、最後まで訴えかけを続けたことからも明らかであるし、弟子たちの言動からも窺い知ることができる。

内村が、最終的決着を神に任せることから希望を得ていたのは確かであるし、その社会批判が強靭なのも信仰に基づく批判だったからである。しかし信仰を根拠にこの世的なものを対象化する立場だけでは、様々な人々との繋がりの中で説得力をもつことは難しいだろう。信仰に基く社会批判の、説明の方法までが信仰的なだけのものであると、その説明は信仰を共有可能な範囲にまで有効でないであろう。彼の考え方が「運動」へと発展することはなかった原因の一端はこの点にあるのではないだろうか。

内村は宗教者である。彼の抵抗が受動的消極的であったことを批判することも可能であるが、それは内村の守備範囲を超えることであったと考えることも可能である。しかし内村の無教会主義には、基本的に単独であるからこそ誰とでも友となれるという開放性がある。そこから社会的・政治的側面を含む様々な人々と繋がりをもつことを今後の・現代の課題として導き出すことも可能であるだろう。